

SHIN CLUB 174

(株)辰 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS渋谷ビル5F

tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450



「kotoriku (コトリク)」 撮影：坂下智広

今月のトーク/monthly talk

土

写真は今月ご紹介する、「kotoriku (コトリク)」という集合住宅です。土でできた洞窟のような建物は遊び心にあふれています。設計の平田晃久さんは有機的な建物をデザインされることで知られていますが、今回は建て主の方から、最初に「アメリカ西海岸のアドビ (日干し煉瓦) のような建物を建てたい」というご要望を聞き、そのままというわけにはいかないけれども、その土のイメージは面白いと感じられたそうです。ニューメキシコ、サンタフェの赤茶けたアドビの建物は、中はひんやりと心地よく、昨今の亜熱帯気候になってしまったかのような日本の夏には、むしろぴったりなのかもしれません。

もちろん日本でも、木造家屋ではもともと土壁、漆喰などを用いる文化があります。原初、人間は岸壁に横穴を掘ったり、洞窟に入ったりして雨露をしのいだわけですから、我々の記憶に動物として土に安らぎをおぼえる本能が残っていても不思議ではありません。しかし今の住宅で土をそのまま使う建物を建てるということは、経済効率の面から大変難しくなりました。また地面そのものも土が見えるところは、都会ではほとんどなくなりました。街はアスファルトで覆われ、川というより下水管が完備されて、本来の地形や川などの土地のありようを感じることができません。

そしてこの夏、土の性質を忘れてしまうということがどういうことに繋がるのか、思い知らされる災害が起きました。本州を襲った雨で異常な量の雨水を含んだ広島市安佐南区の山で崖崩れが起き、多くの死傷者が出たのです。突然降った雨の量が異常だったことがあります。昔は家が建っていなかった山の際、沢のある場所まで住宅開発してしまったことも一因でした。また、真砂土という土の性質も関係していました。土地の形状はひとたび地面を覆ってしまうと、後から来た人にはわからなくなってしまう。ハザードマップも出されていたそうですが、存在自体を知らない

人が多かったということもわかりました。

この夏休み、福井県的美浜地方を訪れました。若狭湾を含む国定公園に三方五湖という汽水湖 (淡水湖も含む) があります。近くの山からその景色を一望したところ、日本海側から陸地に向かって広がる山々のいたるところで地滑りの跡が見られました。家も建っておらず道路も走っていない山中なので、実質被害はないのかもしれませんが、「山は崩れるものだ」という思いを強くしました。だからせめてその土地に昔から伝わる言い伝えを大事にしたいものです。地名にも防災の知恵が隠されているといえます。

例えば、河川浸食を受けやすい場所では「カツ」(勝、渴、旦、割)、水気の多いところや地崩れが多い所では「シシ」(獅子、穴、鹿、猪)、崖地の斜面では(坂、崖、垂、欠、岸、傾、崩、刈、峡)、砂州や干潟は「サガ、ソガ」(佐賀、嵯峨、曽我)、崖関連では(日向、日陰、裏、腰)、崖や深い谷、絶壁を表す「クラ」(倉、蔵、鞍、暗)、土砂流出のある場所「アズ、アツ」(小豆、厚、熱、篤、安土)、埋め立てたところや地すべりで埋まった場所を意味する「ウメ、ウマ」(梅、埋、宇目、馬) など。「～が丘」「～台」などと、開発で新たな地名を振られたところは、その背景は見る影もなくなってしまいます。古い町名はなるべく残しておいた方がいいということでしょうか。

さてその三方五湖最大の湖「水月湖」は、年縞 (長い年月の間湖沼などに堆積した特徴的な縞模様の湖底堆積物) で知られています。流入する大きな川もなく、「深い湖底にほとんど酸素がないことから生物もいない」「湖底が毎年沈降するので湖が埋まらない」という好条件が重なって、水月湖の年縞は現在では「奇跡の堆積物」と呼ばれています。精度の高い年縞は5万年の地球の環境変化の指標となり、2012年世界放射性炭素会議総会で、地質学的年代決定の事実上の世界標準となりました。

kotoriku (コトリク)



自然の山のような集合住宅

いつも、建築という人工物と自然が融合する、あるいは建築の中に自然が拮抗して入ってくるものを作りたいと考えている。

この建物は、緩やかな谷になっている住宅街の交差点に面して建つ。直交した四角い線の建物ではなく、不規則な街区を反映させた変形グリッドで構成した1フロア5戸のプランを、一番下から立ち上げて、その角を削っていくという作業を行った。そして、駅からまっすぐのびた道の突き当りに、丘のような形状の建物を作り出した。

いわゆるデザイナーズマンションはバルコニーがなく、サッシで閉じられた室内空間で乾燥機を使って洗濯物を干すものがほとんどである。それをもう少しナチュラルな、外の生活と中の生活が混じるようにバルコニーを作って、自然に連なっていく形状を考えてみた。同時に、そこに緑があることが重要である。賃貸住戸であるが、1階の1住戸と3階は建て主の自邸なので、植栽は建て主関係の住戸と共用部のバルコニーと屋上に集約し、継続的なメンテナンスを維持するように計画した。

外壁はコンクリート打ち放しだが、土のような色合いを持たせるため、コンクリートに茶色い顔料を混ぜて着色した。また一部の外壁には、鉄板に皺を施して型枠に貼り、コンクリートに金属の皺感を転写した。コンクリートそのものは何も形がないものだが、型枠によって、鉄のようなものになれば、木のようなものにもなり、様々な素材感がつながっている雰囲気を醸し出す。住戸内部は通常の滑らかな打ち放し型枠でなく、普通ベニヤにして、あえて木の表情が出るようにしている。コンクリートだが、木に囲まれているようなテクスチャを生み出した。

室内は、洞窟の中、あるいは木の上のような部屋と変化に富んでおり、昼間、四角い公共空間で過ごさなくてはならない人たちが、楽しみに帰宅できるような空間となっている。

建物名の「コトリク」というのは、「小鳥が来るような場所を」と建て主が命名された。奥様が生前詠まれた句の中に出てくる言葉だという。

(平田晃久氏 談)

所在地：目黒区

構造：RC造 規模：地上3階 塔屋1階

用途：共同住宅

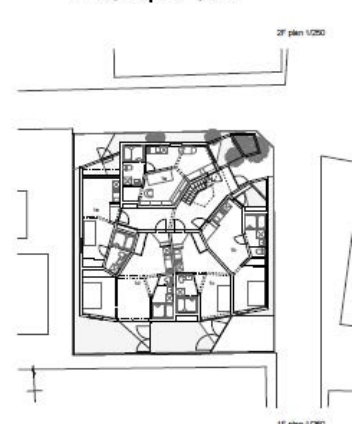
設計・監理：平田晃久／平田晃久建築設計事務所

プロデュース・管理：プリズミック

施工担当：内海

竣工：2014年3月

撮影：坂下智広



①北東側外観。地形のゆがみをそのままグリッドにして立ち上げたプラン。打ち放しコンクリートだが、土色に着色された壁や、バルコニーからあふれる緑が周辺に対して心地よい表情を見せる②3階バルコニーからの眺め。中央に伸びる道路は駅まで通じる③2階2a住戸。緑あふれるバルコニーは共用空間④3階3a住戸。着色されたコンクリートや木のような壁の質感が、木製建具や間仕切りと違和感なく納まる⑤東側外壁の鉄板型枠を作る木製工作物⑥木製工作物で両側からプレスして皺がつけられた鉄板⑦実際の壁面に設置したところ⑧配置図⑨1F-2F平面図



平田晃久氏。青山の事務所にて

今月は、「コトリク」の設計者、平田晃久氏をお迎えしました。

—「コトリク」は、有機的なデザインが若い方たちの共感を得て、すぐに入居者がきまったそうですね。生き物のような楽しい建物です。

平田：大学の進路では、生物に行くか建築に行くか迷いました。子供の頃から自然の中で遊ぶことが好きだったので、「遊んでいるときと建物の中にいるときとは違うな」と、建物の中でも、もう少し自然環境に近づけないものかなと感じていましたね。

大学卒業後は、伊東豊雄さんの仙台のメディアテークに、自分の求めている感覚に近いものを感じたので入所したいと思いました。当初は3年くらいで独立しようと思っていましたが、結局8年間在籍しました。特に最後の3年は好きにさせていただいて楽しかったですね。あてもなくて独立したものですから、1、2年ぶらぶらするかなとは思っていましたが、数カ月後、あるコンペがあり、応募しました。

—「柵屋」という会社のショールームですね。

平田：シンプルな5mグリッドのコンクリート壁を斜めにカットして森の中のようなスペースを作りました。お店の中に入ってみたくなるような、あるところまで行くとまた別のところに行きたくなる、奥行感を出しました。インターネット上のコンペでたまたま良いクライアントと出会ったのですが、それからも人との出会いが重なって今まで来ている感じですね。

—住宅や、商業地区の計画も手がけられていますが、2011年の東北の震災では、平田さんはどのような経験をされましたか。

平田：震災は高いビルにいたときに遭遇したのですが、延々と階段室を下りていくことになって違和感がありましたね。街の作られ方として、ただ下に行くだけのアクセス、袋小路のような作りは間違っていると感じました。ビルの建てられ方を変えたい、チャンスさえあればそういうことにも挑戦したいと思ったことが一つ。

もう一つは、東北の震災後、建築家としてできることはあるのかと悩んでいたとき、伊東さんから陸前高田でコミュニティのための場所「みんなの家」をつくるきっかけをいただき、藤本壮介さんと乾久美子さん、写真家の畠山直哉さんとの協働作業を通じて、建築の作り方の原点に戻った体験をしたことです。

普通、我々が建築を建てるときには、敷地が決まっていて、法的な制限も予算も決まっています。でもそもそも、建築とは誰のどんな活動のため



第13回ヴェネチア・ビエンナーレの金獅子賞を受賞した、東北復興プロジェクト陸前高田の『みんなの家』。コミッションの伊東豊雄氏を中心に、ヴェネチアの日本館の展示と建設工事が並行して行われた。(写真:平田晃久建築設計事務所)

Akihisa Hirata

に、どこにどんな建物を建てるか、ということから生まれるものです。

最初は仮設住宅に小さな集会所を建てる予定でした。それが、地域のリーダーのアイデアで一気に違うフェーズに入りました。一時避難所である体育館で生まれ始めていた人々のつながりは、仮設住宅に入居する時点で、各所に散り散りになってしまった。そういうバラバラになった人たち同士が、「会ってあたたかい時を過ごせるような場所がほしい」という思いが生まれていました。そしてリーダーが「ここに」という場所を探してこられた。街のいろんなところから見えて、海も見える。集まるための場所が切実に求められているというリアルな状況の中に巻き込まれながら、3人の建築家が共同して働けたことは、本当に貴重な経験でした。本来、「人が集まる」という根っこの部分から建ち上がってくるものこそ「建築」なわけですから。

—海外でのお仕事も多いですね。

平田：最近では、日本と海外と半々で仕事をしていますね。

海外では、やはり期待されていることが多く、それなりの責任も出てきますが、やりがいはすごくあり、楽しんでやっています。国内の建築コミュニティとは少し違う規範、例えばヨーロッパで何か建てたいという思いもありますね。今、チリでは、太平洋を臨む住宅、台湾では空港近くの複合施設や、高層集合住宅をやっています。台湾の方は日本を好意的に見てくれている人も多いし、気候が温暖で仕事がしやすいですね。

今後、日本でできる建物の数はどうしても減少する傾向にあります。少なくとも、財産として貴重なものを残したいですね。現在、群馬県大田市で図書館と美術館の複合施設を設計していますが、他の地方都市同様、駅前の空洞化が問題となっています。そんなところに、駅前に建築だけポンと建てても人が来なければ意味がない。それでプレイベント的に設計作業を利用者と共有しようとしています。ワークショップなどを開いて、仕事量はほとんど倍になって大変ですけど、最初のきっかけを役所や市民団体といっしょに、建築家も加わって何とかしてつくらなければならないと思います。陸前高田の経験を生かして、建物が建ち上がるときに、そこを使う人たちのエネルギーを最初からどれだけ集め、どれだけ取り入れられるのか、頑張っているところです。

—本日はありがとうございました。

「東北の復興支援プロジェクト『みんなの家』では、建築の原型ともいえる体験をしました」

平田晃久

1971年 大阪府に生まれる
1994年 京都大学工学部建築学科卒業
1997年 京都大学大学院工学研究科修了、伊東豊雄建築設計事務所入所
2005年 平田晃久建築設計事務所設立
現在 京都大学、東京工業大学、多摩美術大学 非常勤講師
東北大学特任准教授

主な受賞歴

2008年 第19回2007JIA新人賞(柵屋本店)
2010年 グッドデザイン賞(alp)
2012年 第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 金獅子賞



「柵屋本店」(2006年)

写真: Nacasa&Partners

社内勉強会

「人生とは？働くとは？プロとは？」

さる、8月9日、本社社員集会の勉強会において、(株)ユニホー、(株)ZENホールディングス監査役の吉田健司淑徳大学経営学部教授をお招きして、講演いただきました。
社員一同、日々の仕事の仕方や生活について、今一度振り返ることができました。
講演内容を一部抜粋してお届けします。



吉田健司氏

ユニホー監査役
ZENホールディングス監査役
淑徳大学 経営学部 教授

1975 年、早稲田大学理工学部大学院卒業、化学会社入社。米イリノイ大学で MBA 取得。その後、(株)ビット 89 設立。
ビジネス分野に精通した「経営企画室」としてリサーチ、セミナー、研修、講演、コンサルティングなどの支援を行っている。

「働く」と言うことは「傍（はた）を楽にする」つまり、周囲の人を楽にする、ということです。同じ会社の仲間の仕事をやって、他の人が楽になる一働くとは本来そういう意味です。

それでは「仕事」とはどういうことでしょうか。よく「もう仕事が嫌です」と言ってくる社員がありますが、よく聞いてみると人間関係で悩んでいることが多い。ある人は上司との人間関係に悩んで会社を辞めたいと言っていました。そこで「仕事は、『事』に『仕える』と書くんだ。人間関係でやめるのはおかしいだろう。それに、ほかの会社に就職しようとしても、仕事の流れをすべて知ってからでないと、仕事を分かっていないことになるよ」と指摘しました。すると彼は、ただ言われた仕事だけをやっていたということに気が付いて、隣の人や他部署の人との仕事の関連性を理解するようになり、その後「辞めません」と伝えてきました。今は、経理部長になっているということです。仕事はある程度、やりきらないと本当の面白さはわからないのです。

さて、こちらの会社は、建築施工のプロ集団だと思いますが、「プロとは」という点についてお話ししましょう。

第一に「技能」です。現場での技能が低いか、高いか、ということがあると思います。技能の低い人はビギナーと言います。そして、もう一つ、誰のためにやるのか、ということです。自分のためにやっているのか、相手のためにやっているのか。相手のためにやる人をエンターテイナー

と言います。技能が低くて自分のためにやっている人は凡人です。技能が高いけれど、自分のためにやっている人は、アマチュアです。プロは常に技能を磨き、相手のためにやる人です。例えば、上司や人事の人に頼まれたときは、期限までにやる精神。技能を磨き続けることもプロ精神です。

学生は、宿題を出すと、最初はあまり力を入れないが、提出直前になると一気に力を入れる。これを「土壇場」と言います。そして納期を過ぎてしまうとブチッと切れてしまう。今度は「修羅場」がやってきます。一方、プロは、仕事を請けるとすぐに準備して一気にやってしまう。残りの時間は何が足りないか、考える。これがプロの曲線です。やはり大事なことは計画を立てて、進捗通りに進めることが大切だと思います。

さらに、プロのプロたる所以は技術を磨くとともに、社会の動きを身に着けることです。世の中の動きにも注意していただきたいのです。例えば 1 週間のうちに「ガイアの夜明け」など、TV や新聞を見ているか？全部調べる必要はありません。大事なのは定点観測と言って、どれか一つを選んで常に必ずチェックすることです。世の中の風向きが変わるとどこかのメディアが取り上げる。すると他のメディアも同じように取り上げます。現場で働く人は、定点観測として 1 つは自分の情報を持っているとよいと思います。こうして磨き上げることが「碩学」への道に繋がるのです。

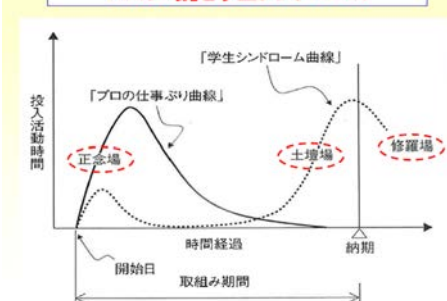
仕事と生活の関係



プロ意識の構造

		主 体	
		自 分	他 人 (顧客)
専門能力 (技能・知識)	低 (未熟)	凡 人	駆け出し (ヘボ)
	高 (卓越)	アマチュア (オタク)	プロフェッショナル (職人)
		(Meイズム)	(エンターテイナー)

3つの「場」と学生シンδροーム



「(仮称)Y house II 新築工事」 上棟式 8月9日



免震構造の住宅が上棟いたしました。猛暑の中かき氷をいただきながらのお祝いでした。

構造：RC 造
規模：地下 1 階 地上 3 階
用途：専用住宅
設計：インテルメディア・デザインスタジオ
完成予定：2014 年 11 月

「kotoriku」が『新建築』2014 年 8 月号に掲載されています。ぜひ、ご覧下さい。

今月号でご紹介した、「kotoriku」が 8 月 1 日発売の『新建築』8 月号に、掲載されています。どうぞご覧ください。



編集後記

・本州の大雨で、広島県では大きな土砂災害が起きました。建物をまず、その場所に建てるべきかどうかが問われています。ハザードマップの情報を私たち自身が真摯に受け止め、被害を最小限に抑えることが肝要だと思います。